

# ドキュメンタリー映画の世界2007

〈映像と身体〉の人類学

12 / 8 [sat] · 9 [sun] · 22 [sat] · 23 [sun]

入場無料 | 京都造形芸術大学・映像ホール

主催：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター，映画学科

撮影：ヴィジュアルフォークロア 北村皆雄



12月8日(土)

- 11:00 - 市岡ゼミ『信仰の灯し火 - 古要舞・現代に生きる神と人のかたち』(43分)
- 13:00 - 市岡康子『女の島トロブリアンド』(50分)
- 14:00 - 市岡康子『ジェイ・ヘム・リュウ - カンボジアの神がかり』(50分)
- 15:00 - ◆レクチャー / 市岡康子 (60分)
- 16:30 - 大森康宏『私の人生 ジプシー・マヌーシュ』(60分)
- 17:50 - 大森康宏『津軽のカミサマ』(93分)
- 19:30 - ◆レクチャー / 大森康宏 (60分)

12月9日(日)

- 10:00 - 岩谷彩子『ギリシャ - 歌謡とロムの息づく国』(25分)
- 10:30 - 分藤大翼『Wo a bele - もりのなか -』(30分)
- 11:00 - 川瀬慈『ラリベロッチ 終わらなき祝福に生きる』(25分)
- 11:30 - 新井一寛『エジプトのスーフィー教団 - 若きシャイフと神への熱情』(30分)
- 13:00 - 北村皆雄他『海南小記序説 - アカマタの歌 - 西表島 - 古見 -』(83分)
- 14:40 - 北村皆雄『見世物小屋 - 旅の芸人 - 人間ポンプ一座』(119分)
- 17:00 - 北村皆雄『修験 - 羽黒山 - 秋の峰』(115分)
- 19:00 - ◆シンポジウム「映像人類学の新しい地平」  
北村皆雄 + 新井一寛 + 川瀬慈 + 北小路隆志 + 八角聡仁 (90分)

12月22日(土)

- 10:00 - アオレイオス・ソルト『神聖なる真実の儀式』(120分)
- 13:00 - 野田真吉『冬の夜の神々の宴 - 遠山の霜月祭』(45分)
- 14:00 - 野田真吉『生者と死者のかよい路 - 新野の盆おどり・神送りの行事』(36分)
- 14:50 - リュミエール映画・日本編 (29分)
- 15:40 - 内田順子 + 鈴木由紀『AINU Past and Present』(102分)
- 17:30 - ◆レクチャー / 内田順子 (60分)
- 18:50 - ニール・ゴードン・マンロー『イヨマンデー 秘境と叙情の大地で』(29分)
- 19:30 - ニール・ゴードン・マンロー『カムイ・イヨマンデー』(53分)

12月23日(日)

- 10:00 - トリン・T・ミンハ『ルアッサンブラージュ』(40分)
- 11:00 - ジャン・ルーシュ『人間ピラミッド』(88分)
- 13:30 - ビクター・マサエスヴァ『イマジニング・インディアン』(79分)
- 15:00 - サミール『忘却のバグダッド』(116分)
- 17:30 - クリス・マルケル『不思議なクミコ』(54分)
- 18:30 - ◆シンポジウム「映像と身体のパリティクス」  
北小路隆志 + 八角聡仁 + 森山直人 (90分)

◎ 講師プロフィール

市岡康子 (いちおか・やすこ)

東京都立大学卒業後、1962年に日本テレビ入社。72年、日本映像記録センターの設立に参加。66年から90年まで『すばらしい世界旅行』のディレクター、プロデューサーとして、アジア太平洋地域を中心に各民族固有の生活と文化を民族誌的な視点から記録。著書『KULA - 貝の首飾りを探して南海をゆく』(コモンズ)。元立命館アジア太平洋大学教授。

大森康宏 (おおもり・やすひろ)

立命館大学映像学部教授、学部長。国立民族学博物館名誉教授。専門は映像人類学(民族誌映画)。1943年東京生まれ。立教大学経済学部卒業後、フランスでジャン・ルーシュに師事。パリ第10ソルボンヌ大学民族学部博士課程修了、民族学博士号取得。映像作家として、1995年「津軽のカミサマ」フランスパリ第14回民族誌映画大会ナヌーク賞(グランプリ)受賞等を含む50本あまりに及ぶ民族誌映画は国際的に高い評価を得る。編著に『映像文化』(ドメス出版)他。

北村皆雄 (きたむら・みなお)

映像作家、ヴィジュアルフォークロア代表。1942年生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒業。78年、宮田登、野田真吉らとともに「日本映像民俗学の会」を設立。インド、ネパール、チベット、中国、韓国、沖縄などアジアを中心に映像民俗学の分野を開拓し、数多くの作品を手掛ける。編著『見世物小屋の文化誌』『千年の修験』(新宿書房)他。

内田順子 (うちだ・じゅんこ)

国立歴史民俗博物館民俗研究系准教授。専門は音楽民俗学。1967年生まれ。東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。著書に『宮古島狩俣の神歌 - その継承と創成』(思文閣出版)。

会場: 京都造形芸術大学・人間館 B1F・映像ホール  
料金: 無料 (10月22日～事前予約受付開始 / 定員各日100名)  
主催: 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター, 映像学科  
協力: 京都造形芸術大学 芸術文化情報センター  
ご予約: 京都芸術劇場チケットセンター (平日 10:00~17:00)  
tel: 075-791-8240 e-mail ticket@kuad.kyoto-art.ac.jp  
お問い合わせ: 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター  
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116  
tel: 075-791-9437 fax: 075-791-9438  
e-mail info@k-pac.org URL http://www.k-pac.org/

[アクセス]

- ・JR「京都」駅、京阪「三条」駅、阪急「河原町」駅から  
京都市バス5番「岩倉」行き乗車、「上終町・京都造形芸大前」下車 (京都駅から約50分)
- ・市営地下鉄「丸太町」, 「北大路」駅から  
京都市バス204循環に乗り、「上終町・京都造形芸大前」下車 (約15分)
- ・京阪電鉄「出町柳」駅から  
叡山電鉄に乗り換え、「茶山」駅下車、徒歩10分  
タクシーで10分
- ・駐車場はございませんので、車・バイクでの来場はご遠慮ください。

[佐藤真監督追悼上映会のお知らせ]

2007年12月16日(日)13時より、京都芸術劇場・春秋座(京都造形芸術大学内)にて、第1回京都造形芸術大学映画祭の一環として「佐藤真映画祭 - ドキュメンタリーの結晶」が開催されます。監督の生前に企画されていたものですが、急逝に伴い追悼上映として行われることになりました。上映作品は『エドワード・サイド Out of Place』他。詳細は下記までお問い合わせください。  
京都造形芸術大学 映像学科研究室 075-791-9353 (平日9~17時)

新井一寛 (あらい・かずひろ)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程。1975年生まれ。編著に『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ!』(新宿書房)。

川瀬慈 (かわせ・いつし)

日本学術振興会特別研究員。2001年よりエチオピア音楽の映像記録を開始し、5本のドキュメンタリー映画を制作。『Room 11, Ethiopia Hotel』(2006年)は、各国の映画祭で高い評価を得る。

北小路隆志 (きたこうじ・たかし)

映画批評家。京都造形芸術大学映画学科准教授。1962年生まれ。早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了。『王家術的恋愛』(INFAS パブリケーションズ)、共著に『映画の政治学』(青弓社)、編著に『社会派シネマの戦い方』(フィルムアート社)他。

八角聡仁 (やすみ・あきひと)

批評家、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター教授。映像論、身体論、演劇論。1963年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。編著『現代写真のリアリティ』(角川学芸出版)他。

森山直人 (もりやま・なおと)

演劇批評家、京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授。現代演劇・表象文化論。1968年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程単位取得退学。





写真や映画などの映像テクノロジーと人類学はいずれも19世紀に誕生し、相互に深く関係しながら発達してきた。そして、それらが一方で植民地支配の構造に加担し、人種や民族性に関わる偏見や差別を助長してきたことへの反省や批判も、すでに久しく行われている。しかしそれに対して、支配や収奪を離れた観察者と観察対象の関係がどうあるべきか、どのような映像表現や人類学が「正しい」ものであろうかは必ずしも簡単ではない。この上映会「〈映像と身体〉の人類学」では、そうした根源的な批判や議論をふまえた上で、広義の民族学映画の古典から若手作家の注目作までを取り上げ、映像人類学(visual anthropology)の新たな広がりを展望するとともに、人類学的な知とそれに対する批判を通して人間の経験としての映像の本質や可能性を多角的に探っていききたい。さらにまた、舞台芸術研究センターにおける「メディア・テクノロジーと身体」に関する考察をそこに接続し、異なる身体文化との遭遇が新たな映像の哲学を構築してきた歴史に着目しながら、映像による身体表象をめぐる諸問題について検討する。

この上映会は、去る9月4日に亡くなられたドキュメンタリー作家で本学教授の佐藤真さんと一緒に構想し、2年前から相談を重ねていたものだった。上映作品の選択も大半は佐藤さんによるものである。佐藤さんとはこれまでも「アジア」「パレスチナ問題」「パーソナル・ドキュメンタリー」などのテーマで、ドキュメンタリー映画の特集上映会を企画してきた。いずれも映画作家としての佐藤さんの関心と強く結びついたものであることは言うまでもない。

第一作の『阿賀に生きる』以来、『Self and Others』『花子』『エドワード・サイド Out of Place』などの作品で、ドキュメンタリー映画に新しい地平を切り開いてきた佐藤さんは、同時に多くの重要なドキュメンタリー論も遺しているが、その中心的な命題は、「ドキュメンタリーは世界を批判的に映し出す鏡である」、そして「ドキュメンタリーは現実の断片を再構成したフィクションである」というものだった。この二つはある意味で背反する。カメラが持つ冷徹な機械的再現力は先験的なイデオロギーにとらわれることなくカオスとしての世界を映し出すことができる。しかし一方で、対象となる現実がカメラの存在によって変容し、撮影・編集の過程で「演出」される。佐藤さんはドキュメンタリーをめぐる素朴な事実信仰を厳しく戒め、ロバート・フラハティの『極北のナヌーク』以来、ドキュメンタリーが「カメラの前での再現」であり、さらにその断片を作家の主観によって再構成したものであることを強調してやまなかった。それは対象への介入において現実に対する責任を引き受けることを意味すると同時に、事実などどこにも存在しないのだというニヒリズムと紙一重であり、映画作家はそのぎりぎりの綱渡りを続けるしかない。映像と人類学がともにその視線と欲望の根源に虚無を宿していることも佐藤さんは指摘していた。そうしたことの意味をいま改めて重く噛みしめながら、人類学的映像において「事実」はどう見出され、どのように「演出」されてきたのかを見つめなおし、問いなおそうと思っている。

八村聡仁(批評家、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター教授)

エジプトのスーフィー教団  
若きシャイフと神への熱情

2006年/30分/ビデオ  
監督:新井一寛

シャイフと呼ばれる師匠の下でアラーを賛美し、修行に励むスーフィー教団。作者はそこに宗教実践を調査する過程で帰国後の分析のために撮影した映像を、説明的なナレーションや字幕を極力排し、調査の流れに沿ったロード・ムービーに仕立てた。



海南小記序説  
アカマタの歌 - 西表島・古見 -

1973年(2006年再編集版)/83分  
16ミリ(ビデオ上映)  
監督:北村皆雄 他

沖縄西表島古見に残る豊年祭には仮面衣装のアカマタ・クロマタ・シロマタの3神が登場する。秘儀の撮影は禁じられたが、島の17軒のライブ・ストリートと、島を出ていった人々の赤裸々な内面に迫ることになった。



12 / 22 (sat) ・ 23 (sun)

神聖なる真実の儀式

2002年/120分/16ミリ  
監督:アオレイオス・ソリト

フリピン先住民族の血を引く監督が、故郷のパラワン島へ帰って神聖なる儀式や日常生活を撮影。多国籍企業などの介入により生活が破壊されていくことへの怒りが画面にみえざる。作品提供=山形国際ドキュメンタリー映画祭



冬の夜の神々の宴

— 遠山の霜月祭

1970年/45分/16ミリ  
監督:野田真吉

戦後日本のドキュメンタリー映画を牽引してきた野田真吉が、社会変革の運動から民俗学へと接近し、長野県南の山境、遠山地方(下伊那郡上村下栗)に伝承されてきた呪術的な仮面の舞を一夜の夢幻として詩的に撮りあげた「民俗神事芸能三部作」の第一作。



生者と死者のかよい路

— 新野の盆おどり・神送りの行事

1991年/36分/16ミリ  
監督:野田真吉

民俗神事芸能三部作の最後を飾る野田真吉の遺作。新野(長野県下伊那郡阿南町)の盆おどりのクワイマックス、盆に迎えた祖先の霊とつながったばかりの新霊を東の空の彼方に送る神送りに焦点をあて、舞踊の陶酔の中で、目に見えないはずの祖霊と人々の交歓が描かれる。



リュミエール映画・日本編

1897-99年/29分/ビデオ上映  
監督:コンスタン・ジレル、ガブリエル・ヴェール、柴田常吉

1895年のシネマトグラフ誕生直後から、リュミエール社は世界各地にカメラマンを派遣し、当地の生活や習俗をフィルムに収めた。最初期の映画がとらえた日本の光景。「日本の宴会」ほか全33作品。映像手配協力=東京シネマ新社



AINU Past and Present

マンローのフィルムから見えてくるもの  
2006年/102分/ビデオ  
監督:内田順子 + 鈴木由紀

アイヌ文化研究に取り組んだスコットランド出身の医師、ニール・ゴードン・マンローが残した映画に関する資料を手掛かりに、フィルムが人の手を介して新たな意味を帯びていく歴史を辿り、現在のアイヌ文化の伝承によって彼の映画が持つ意味を考察する。



カムイ・イヨマンデ

1931年/53分/35ミリ(ビデオ上映)  
監督:ニール・ゴードン・マンロー  
(英国国立映画TVアーカイブス保存版)

スコットランド生まれで日本に帰化した医師マンローによる、北海道ニ風谷におけるアイヌの熊送り儀礼の記録。RAI(王立人類学協会)への報告のために英国に送られたヴァージョン。映像手配協力=東京シネマ新社



見世物小屋

— 旅の芸人・人間ポンプ車

1997年/119分/ビデオ  
監督:北村皆雄

祭りの場に忽然と表れ、おどろおどろしい絵看板と巧みなコマシで、物悲しい別世界へと引きずり込む見世物小屋。この作品は最後の見世物芸人と呼ばれた「人間ポンプ」こと安田里美さんとその一座9人の興行を内側から記録した。



修験

— 羽黒山・秋の峰

2005年/115分/ビデオ  
監督:北村皆雄

山岳信仰や仏教や民間習俗が融合して生まれた(修験)。中世からの伝統を今に伝えているのは、羽黒山荒瀬寺だけである。生きながらに(死と再生)を体験する山伏の秘密の儀礼(秋の峰)の修行の全容を初めて記録。



イヨマンデ

— 秘境と叙情の大地で

1931年撮影、1965年改編/29分/35ミリ(ビデオ上映)  
監督:ニール・ゴードン・マンロー  
(東京オリンピック映画社により改編)

1931年にマンローが撮影し、日本に残ったフィルムを、東京オリンピック映画社が1965年に再編集し、ナレーションや音楽などを付した改編版。映像手配協力=東京シネマ新社



ルアッサンブラージュ

1982年/40分/16ミリ  
監督:トリン・T・ミンハ

ベトナム生まれで先鋭的な女性思想家としても知られる映画作家の初監督作品。セネガルの部族の生活を撮影しながら、ドキュメンタリー映画における視線と権力の構造を異化し、民族学的なアプローチを再審に付す。フィルム提供=ダグレオ出版 協力=エース・ジャパン



人間ピラミッド

1961年/88分/16ミリ(ビデオ上映)  
監督:ジャン・ルーシュ

宗主国フランスから独立しつつあるコート・ジヴォワール共和国の首都アビジャンで、地元の現実の高校生たちに黒人と白人の関係をめぐるドラマを演じさせながら、フィクションを通して浮かび上がる彼ら自身の物語を記録した「人類学的劇映画」の傑作。



イマジニング・インディアン

1992年/79分/16ミリ  
監督:ビクター・マサエスヴァ

ネイティブ・アメリカン、ホビ出身の映像作家が、多面的な視点と錯綜した構造を通して、ハリウッド映画などに見られる無意識の偏見や差別を浮き彫りにし、先住民族の文化やイメージがいかに商品化されるかを鋭く描き出す。作品提供=山形国際ドキュメンタリー映画祭



忘却のバグダッド

2002年/116分/35ミリ  
監督:サミール

イラク系ユダヤ人を親を持つ女性社会学者エラ・シヨハットらのインタビューを交えながら、映画史の中で「アラブ人」「ユダヤ人」がどのように表象されてきたかを検証し、ステレオタイプ化したイメージを解体する。フィルム・写真提供=国際交流基金 協力=エース・ジャパン



不思議なクミコ

1965年/54分/35ミリ  
監督:クリス・マルケル

オリンピックに沸き返る1964年秋の東京を舞台に、フランス語を学ぶクミコという日本女性とフランスである作者の対話を軸にして、日本とは何かを思索する詩的なプライベート・ドキュメンタリー。



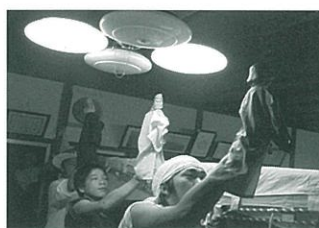
12 / 8 (sat) ・ 9 (sun)

信仰の灯し火

— 古要舞・現代に生きる神と人のかたち

2006年/43分/ビデオ

監督:立命館アジア太平洋大学・市岡康子ゼミ  
大分県中津市海の上(ホキノエ)地区で3年に一度開かれる神事・古要舞は、国の重要無形文化財に指定されて以来、世俗化を嫌う地域の人々の意に反して研究者やメディアの注目を集めるようになった。時代の流れと信仰心の間で葛藤する村人の想いに迫る。



女の島トロブリアンド

1976年/50分/ビデオ  
監督:市岡康子

ソロモン海に浮かぶトロブリアンド諸島は民族学者マリノフスキーの著作で知られる母系制の島。男は収獲したヤムイモを母系に連なる姉妹やオバ等に贈り、女性たちは男の死に際して盛大な喪明けの儀礼を行う義務がある。一組の男女は生涯をかけての互酬性で結ばれている。



ジェイ・ヘム・リュウ

— カンボジアの神がかり

1994・2007年/50分/ビデオ  
監督:市岡康子

カンボジア内戦終結直後の1993年、アンコール遺跡近くで出会った農婦ヘム・リュウ。彼女は民衆が信仰する村の精霊ネアクタの霊媒だった。宗教を全否定したボル・ポト政権下で生き延びたネアクタ信仰の実際を、1日がかりの村祭に見る。



私の人生

ジプシー・マヌーシュ

1977年/60分/16ミリ(ビデオ上映)  
監督:大森康宏

フランスの移動民族(ジプシー)約10万人のうち、2万人ほどを占めるマヌーシュたち。社会の枠から外れ、人工的な国境にとらわれことなく、天地はざまを馬車でゆっくりと移動しながら生活する彼らの日常生活と宗教観を、非ヨーロッパ人の眼からとらえる。



津軽のカミサマ

1994年/93分/16ミリ(ビデオ上映)  
監督:大森康宏

初めカミサマとして人の病を治し、占ってきた工藤タキさんは、やがてイタコの免許を師匠からもらい、恐山で開業するようになった。おしらさまの儀式や遊ばせを中心に、彼女の活動を長期間にわたって追跡、記録。周囲の人々との関係もカメラに収める。



ギリシャ  
歌謡とロムの息づく国

2007年/25分/ビデオ  
監督:岩谷彩子

オリエントからオキシデントへーロム(「ジプシー」)の移動の分岐点となったギリシャ。そこに現在も暮らすロムの生活を、彼らが一端を担うギリシャ歌謡とともに紹介する。歌謡やビジネスで活躍する彼らの横顔に、差別と迫害の歴史の影が見え隠れする。



Wo a bele — もりのなか—

2005年/30分/ビデオ  
監督:分藤大翼

アフリカ、カメルーン共和国の熱帯林に暮らすBakaと呼ばれる「森の民」の生活を、人々のしぐさや表情、様々な生命が織りなすサウンドスケープなどを通して、同時代に生きる文化人類学者である作者自身との関係とともに描き出す。



ラリベロッチ  
終わりなき祝福に生きる

2005年/25分/ビデオ  
監督:川瀬慈

エチオピア高原を移動し、家々の軒先で唄い、乞い、祝福を与える吟遊詩人集団ラリベロッチ。彼らは唄うことを止めるとハンセン病を患うと信じ、病への恐怖から唄い続ける集団である。と人々のあいだでは古くから言い伝えられてきた。

